

問題点に目がいきがちなアルコール依存症を抱えた人に対するストレングスしこうの看護の定着に向けた事例検討会…笑抱の会@JAPMHN3 6

○片岡 三佳¹⁾、藤原 稔章²⁾、渋谷 隆幸³⁾、藪田 歩⁴⁾、安里 順子⁵⁾、福山 敦子⁶⁾

1) 三重大学大学院、2) 藍里病院、3) リンクよこはま訪問看護ステーション、4) 訪問看護ステーションみのり、
5) ACT-K ねこのて訪問看護ステーション、6) 訪問看護ステーション聲

【背景と目的】「ストレングス」「ストレングスモデル」が教科書でも提示されるようになり、ストレングスを基盤にした看護が身近になっていることと思います。ストレングスモデルを体系化したC. A. Rappら (2014) は、ストレングスを基盤にした実践が拡張されていることは喜ばしいとしながらも、伝統的なアプローチにストレングスをメッキして、「ストレングスアプローチ」というラベルを貼っても、それは新しいボトルの中の新ワインにすぎない…と、そこに潜む危険性を示唆しています。このことは、医学モデル・問題志向型でしっかりと基礎教育を受けた看護職が陥りやすいことと言えるのではないのでしょうか。一方で、医学知識をもっていることは看護職のストレングスです。福祉領域で発展してきたストレングスモデルを看護で活用するとき、自分たちのストレングスをいかに活用し、真のストレングスモデルをめざし、どのように取り入れていくか…を考える必要があります。「患者さんの声をもっともっと聴きたい！」との思いで始まった笑抱の会は、医学モデル・問題志向型中心で考えがちだった看護職が、精神障害をもつ方のストレングスを活かし、「笑顔」と「抱擁」に基づく新たな生活支援を考えようと、日本精神保健看護学会第21回学術集会 (2011年) でのワークショップを機に誕生した会です。看護職者が「笑顔」と「抱擁」の心をもつことが、患者さんやご家族、私たちのリカバリーにつながるという思いが名前には込められています。昨年の同会ワークショップでは、ついつい問題点に目がいってしまう…と言う看護師の声を聴き、入退院を繰り返されるアルコール依存を抱えたAさんについて、ストレングスモデルを用いた検討を行いました。その内容をふまえて昨年12月に、Aさんを交えた検討会を通院されている病院で行いました。Aさんは、「たくさんの人が集まってく

れて、自分のことを知ろうとしてくれたことが嬉しかった」と、後日、話して下さいました。笑抱の会のメンバーは、ストレングスモデルの醍醐味、当事者を交えた話し合いの重要性を実感しました。そこで、精神保健の支援者が多く集まる本学会にてこの経緯をお伝えし、さらにストレングスしこうの看護実践が定着できるように、みなさんの智慧をいただきたいと思い、企画しました。**【方法・内容】**入退院を繰り返されているアルコール依存を抱えるAさんと、ついつい問題点に目がいってしまった看護師のこれまでの取り組みをご紹介します。さらに、Aさんと看護師のストレングスを活用した支援に向けて、ストレングスアセスメントおよび個別リカバリー計画を皆さんと考えます。ストレングスしこう (志向・思考・試行) の文化を精神科病棟に根付かせたいと考えている皆様、それでもついつい問題点に目がいってしまうという思いを抱えている皆様と一緒に考える場とします。**【倫理的配慮】**Aさんへは文書と口頭で説明・同意を得ており、ワークショップ内では個人が特定されないようにアルファベット・X年方式を使用するなど情報に配慮しています。**【最後に】**ストレングスという視点は可能性の彼方に向かう豊かな実践につながる道だと思います。そして当事者も支援者 (伴走者) も自分の力を認めて、自分が元気になる方法を知っていくプロセスがストレングスモデルの醍醐味なのだと思います。一緒に過ごしませんか? **【COI】** 開示すべきCOIはない。